研究区分	教員特別研究推進　地域振興

研　究 テーマ	日本の高校生に SDGs を英語で教える「Ideas into Action」				
研究組織	代表者	所属・職名	国際関係学部・准教授	氏名	ディハーン　ジョナサン
	研究分担者	所属・職名	国際関係学部・３年生	氏名	大舘　楓
		所属・職名	国際関係学部・３年生	氏名	植野　華乃音
		所属・職名	国際関係学部・３年生	氏名	水野　葵
	発　表　者	所属・職名	国際関係学部・准教授	氏名	ディハーン　ジョナサン

講演題目

持続可能な開発目標に到達し、学生の知識と能力を開発するためのバイリンガル高校大学コミュニティクラブ（「The SDGs Terakoya」）を継続する次の「適・小・持続」のステップ

研究の目的、成果及び今後の展望

■日本の文部科学省は、生徒たちに生きる力、語学力、読み書きの能力、地域やグローバルな学習経験を身につけてほしいと願っている（MEXT,学習指導要領「生きる力」；MEXT,Section 8；MEXT,Section 9；MEXT,Section 13）。しかし、すべての日本の生徒がこれらのことができるわけではない（MHLW,2013；Cabinet Office, Govt Japan,2019；MEXT via Mainichi Shinbun,2019）。例えば、多くの生徒は自分の生活を向上させる経験をしたことがなく、教室の外で英語を使うこともないのである。

■そこで私たちは静岡県立静岡東高等学校と協力し、生徒たちにこうしたスキルや経験を身につけさせるための夏期集中ワークショップを企画した。高校の先生と校長先生には、ワークショップの企画と運営を手伝っていただいた。

■高校生（1 年生、2 年生、3 年生）は、自分自身や社会について考えることから、社会問題について議論し分析すること、そして自分自身や地域（学校、オンライン）のために何かを創造することへと進んだ。生徒たちは、ワークショップで行ったことや学んだことを応用したポスター、アート、ゲーム、メッセージを作成した。

図1：SDGsワークショップで高校生が作ったゲーム

■私たちはアンケート、フィールドノート、写真を用いて活動を分析した。生徒たちはワークショップに高い満足度を示し、英語を使ってアイデアやプロジェクトについて話し合い、発表を行った。

■21 世紀言語教育学会（2023 年 10 月 8 日（日）那覇・沖縄）で研究発表を行い、私たちの教材を他の先生方と共有した（オンラインウェブサイト：https://sites.google.com/site/gamelabshizuoka/other/sdgs-terakoya-teaching-research-materials）。

■私たちの観察とフィールドノート、生徒や学校との話し合いの結果、多くの生徒が私たちと一緒に SDGs を英語で勉強し続けたいと思っているが、テストやクラブ活動、学校の宿題との両立を考えなければならない。そのため、今後も高校と連携しながら、こうした問題の解決に努めていきたいと思う。このパイロット・テストは、持続可能性、影響力、教育方法、生徒の成長について新しい方法で考える上で成功し、今後も実践していく予定である。

■私たちはこのパイロット・テストをもとに、2024 年から 2027 年の文部科学省科研費に応募した。この助成金が採択されれば、私たちはこのプロジェクトを継続し、より多くの高校、より多くのセッション、より多くの社会参加型行動へと範囲を広げていく予定である。